ビューヒナーにおける自然観と宿命論の関係

——その表裏一体性について——

竹内　拓史

1

ゲオルク・ビューヒナーは，『ダントンの死』や『ヴォイツェク』などの文学作品を残し，ドイツ文学史にその名を刻んでいるが，父も祖父も医者という家系の出身であり，彼自身も大学では医学部に在籍していた。彼は1836年9月に，『ニゴイの神経系についての研究論文』[1]という論文でドクターの学位を獲得しているし，その年の11月はじめにはチューリヒ大学で『頭蓋神経について』という題目で試験講義を行い，これにより同大学の講師の職を得ている。両親の希望もあったのだろうが，ビューヒナーは幼い頃から医学の道へ進むことを決意していたようである。両親の意思とは関係なく，彼自身も医学研究に価値を見出し，情熱を持って取り組んでいたことが，次のような手紙からも見て取れる。これは彼がチューリッヒに亡命後，故郷の両親に宛てた手紙である。

> 「僕は医学と哲学を精いっぱい努力して勉強するつもりです。この分野にはまだひとかどのことを成し遂げる余地が十分にあります。それに我々の時代は，そのような仕事が認められるのにはうってつけの時代なのですから。」[2]
> （1835年3月9日　家族に宛てて）

しかしその一方で彼は自分の文才に自信を持っていたし，文筆活動で身を立てることも十分に可能であると考えていた。

> 「いずれにせよ，文筆活動をやって暮らしていくことはできるでしょう……。新刊のフランス文学作品の批評をあの文芸誌に送るように勧められました。原稿料もいいようです。そちらにもっと時間をかける気になったら，もっとずっと稼ぐことができるでしょう。ですが僕は

自分の研究計画を放棄するまいと心に決めているのです」[3)]
（1835年4月20日　家族に宛てて）

このようなビューヒナーの自信が実際の才能に裏打ちされていたことに，今では疑いの余地は無い。しかし，その当時ビューヒナーが選んだ道は医学研究であった。しかも上の手紙にも見られるように，文筆活動は彼にとって小金を稼ぐためのものであった。

「ドクターの学位料を払ってしまうと，もはやまったくお金が残りません。何かを書こうにも，全然時間がありませんでした。しばらくの間お金を借りてそれで生活をしていかねばなりません。しかし大きな白い原稿用紙を埋め尽くして，6～8週間の内には背広一揃いを手に入れてやろうと考えています。」[4)]
（1836年6月1日　オイゲン・ベッケルに宛てて）

「つまりデカルトとスピノザ以後のドイツの哲学体系について講義をする予定です。そしてその傍ら，原稿用紙の上で何人かの人間に殺しあいをさせたり結婚させたりしながら，神様に，お人好しの本屋と，たくさんのできるだけ無趣味な読者とを獲得できるようお願いするのです。」[5)]
（1836年9月2日　弟に宛てて）

もちろん，こうした彼の言葉をそのまま受け取ることはできない。彼は医学研究に熱心に取り組む一方で，1836年初頭から夏頃にかけて『レンツ』，『レオンスとレーナ』，『ヴォイツェク』などの文学作品を執筆したとみられる。これは彼がドクター論文の執筆や試験講義の準備をしていた時期と重なる。そのような非常に忙しい時期にもかかわらず，彼が次々と作品を書き上げていったのは，湧き上がる創作意欲が彼の内面にあったからであろう。ここには小金を稼ぐということ以上のものが感じられる。

上の手紙にあるような，文筆活動は金稼ぎにすぎないという姿勢は大げさとも言え，それはむしろ彼独自の自嘲的なイロニーの表れだったのではないだろうか。彼にとり創作活動は，本業であるはずの医学研究が忙しいからといって中断するようなものではなく，内面から湧き出てくる，必然的な行為であった。そういう行為が金になることに対する自嘲的なイロニーが，そしてまたそういう社会の世俗性に対するイロニーが，ことさらに創作活動と金銭とを結びつけた彼の手紙から感じられるのである。

このように，内面から湧き出る行為である文筆活動と，忙しいはずの医学研究の時期とが重なっているのは，非常に興味深い。これは，彼の医学研究と文筆活動にどこか共鳴する部分があり，医学研究に文筆活動が刺激され活発になり，一気に完成に向かったためであると考えられる。そのことは，例えば彼が婚約者のミンナに宛てて書いた手紙の次のような一節からも見て取れる。

「胸が高まるような精神的な活動（引用者注：医学研究）の後の休養。そしてその際に文学作品を創作する喜び。」[6)]
（婚約者に宛てて　1837年1月20日）

またビューヒナーの医学・自然科学研究は，緻密な解剖に基づくものであるが，そのような特徴は自然科学研究だけにはとどまらず，彼の文学作品にも見られる。おそらく最初にビューヒナーの文学的才能を見抜いたグツコーは，ビューヒナーに宛てた手紙で次のように述べている。

「あなたの中心的な長所である，あなたの類まれな偏見のなさ，あなたが書くもの全てに表れているほとんど死体解剖とでも言いたいものはこれ（引用者注：医学研究）に負っていると私には思われます。」[7)]
（グツコーからビューヒナーに宛てて　1836年6月10日）

このように，彼が書いた文学作品と彼の専門分野での研究は，少なからず関係があると思われる。以下の論述においては，その関係の一端を示すため，ビューヒナーの自然観と手紙や文学作品に現われている宿命論的世界観との関連を明らかにしてみたい。またそのためにまず，ビューヒナーがシュトラスブルク博物学会で公表し，ドクターの学位論文ともなった『ニゴイの神経系についての研究論文』と試験講義『頭蓋神経について』の特徴，そこに見られるビューヒナーの自然観を考察し，ついで彼がそのような自然観を持つにいたった背景を考察する。

2

ビューヒナーのテクストのうち，自然科学に関するものは二つある。そのうち最初に仕上げられたのは，『ニゴイの神経系についての研究論文』である。これは二部に分かれており，第一部は精密な解剖に基づき魚類の脳神経

の構造を明らかにすることを目的としており，第二部ではそれらの脳神経が，より高度な動物の神経とどのような関係にあるかを考察している。彼はそれらの結論の一つとして「頭部というのは脊髄と脊椎が変形してできたものにすぎない」[8]と述べている。しかしこれは彼が新しく打ち立てた論ではなく，ゲーテやオーケン（1779-1851）も述べていた，哺乳類の頭骨は脊椎骨の変形であるという論をいくぶん発展させたものであると見られる。

ビューヒナーの考察は，ここからさらに動物の器官の原型的なものへと進む。もう一つのビューヒナーの目的は，この動物の原型を考察することにあった。それは第一部の冒頭に次のような記述があることからも推測される。

> 「脳神経と脊髄神経，また脳のふくらみと頭蓋椎骨とはどのような関係にあるのだろうか。それらのうちのいずれが，脊椎動物の系列の最も低い段階に最初に認められるのだろうか。それらの数が増えたり減ったり，またそれらの分布が複雑化したり単純化したりするのは，どのような法則に従っているのだろうか。これらは重要な問題であり，発生論的方法によってのみ決定され得るものである。すなわち，脊椎動物の神経系の比較を最も単純な構成組織から始め，最も高度なものへと徐々に進め，非常に綿密に行なうことによってのみ決定され得るものなのである。」[9]

ここにはゲーテやサンティレール（1772-1844）も主張したような，原型的なものを探ろうという意図が見られる。[10] 例えばゲーテは，1780 年代には原植物について述べ，また 1790 年には，植物界の原型がいくつかの葉形の類型から成り立ち，茎以外の全ての植物構造がこの類型から導き出されると述べる。それゆえ彼によれば，花弁も果実器官の諸部分も単なる葉の変形に過ぎなかった。[11]

また動物についてはオーケンが，動物体の基本構造を成すのは多数の脊椎環節と肋骨，および四肢であり，高等動物の他の骨格形は環節要素の変形したものであると述べている。例えば彼は，頭骨は四個の脊椎環節から成り，顎骨は肋骨，または四肢骨の変形したものであると述べるのである。[12] 動物に関してはゲーテも同じようなことを考え，あらゆる脊椎動物の骨格は，単一で共通の構成である一つの原骨格が変化したものであると考えていた。[13] これらのゲーテやオーケンの考えは，17 世紀にはベーメ（1575-1624），18 世紀から 19 世紀にかけてはシェリングによって述べられてきた自然観，ドイツ自然哲学の流れで捉えることが可能であり，またこのようにドイツ自然哲学は当時生物学に，例えば個体の発生を研究する発生学や，生物の形態

および構造を取り扱う形態学などにも大きな影響を与えた。それらは特にイギリスではオーウェン（1804-1892），フランスではキュヴィエ（1769-1832）やサンティレールによって研究されていた。

特にキュヴィエは比較解剖学の分野で目覚ましい成果を挙げた。ただし彼の考えには，上に挙げたドイツの自然哲学者たちと決定的に違う点があった。それは彼が解剖学の膨大な知識をもとに，動物をわずか四つのグループに分け，異なったグループ間の比較はほとんど価値が無いと考えたことである。[14] これはゲーテやオーケン，サンティレールが，一つ一つ違った様々な動物が無数にあるのではなく，全動物の解剖学的構造は単一の構造計画の変形にすぎないとし，単一の動物性とでも言うべきものが存在し，それが多数の形態をとって自己を顕示すると考えたのとは異なる考えであった。サンティレールはそのような単一の構造計画により動物を（理念的に）統一的に把握することを「プランの統一性」と呼び，ゲーテは「型の統一性」[15] と呼んだ。そのような考えを持つ彼らには，キュヴィエの考えは受け入れることのできない考えであった。

例えばサンティレールの助手は，脊椎動物を腹部の中央で折り曲げたなら，臍が一番上にきて頭が下になり，それに手と足が生えた格好になるので，イカと脊椎動物は正確に一点ごとに比較可能であり，それらの原型は同じものであると述べた。サンティエールも彼の意見を擁護したため，1830年にキュヴィエと論争になった。ゲーテは，そのサンティレールとキュヴィエとの論争においても，サンティレールの考えを支持した。しかしキュヴィエは，実際的な詳細な解剖による分類に基づき，理念的なことを述べるだけのサンティレールを徹底的に論破した。結果として当時の多くの自然科学者がキュヴィエに従い，その後ゲーテやサンティレール的な自然哲学的思想は力を失っていく。

しかしその後ダーウィンにより，様々な生物が遠い過去において実際的な共通の祖先を持っていたために器官が相同であり，異なる生物が比較可能であるということが明らかになる。ダーウィンの「型の一致は由来の一致によって説明される」[16] という考えが，ゲーテ的な「型」と類似性を持っているということを考慮すると，当時のゲーテらの自然哲学の概念もまた重要な意義を持っていたと言うことができるであろう。むしろキュヴィエのような，生物を四つのグループに分類し，そのグループ同士はお互いに全く関係の無い独立したものであるとする考えは，ダーウィン的な考えとは相反するものである。

ただしここで注意すべきは，ゲーテやオーケンには，ダーウィンの思想の非常に重要な特徴の一つである，様々な生物は時間的に相次いで生じたとい

う考えは無いという点である。なぜなら，全ての生物は共通の源泉から生じたものであり，個々の生物は胚子発生の過程において，生物の階段でそれより下位にあるものに若干の類似性を持つ段階を経過したものであると考えられていたからである。例えばそのことについてキールマイヤー（1765-1844）は次のように書いている。

> 「連なりをなす個々の生物種は，別々に生じたものであるように思われる。しかしそのように別々に発生したにもかかわらず，これら様々な種類の生物の構成と形態とは，互いに真の関係性を持っているように思われるのである。種がお互いに類似性を持ちながらも，また同時に多様性を持つということから，まるでそれらがその起源に共通の祖先を持っているように思われるのである。」[17)]

この「共通の祖先」というのは，ドイツの自然哲学者たちが考えた，生物の全グループに共通するプランであり，構造を一致させるものであろう。それは精神面で言えば生気論者の言うところの宇宙を維持する，自然の精神である神であり，物質面で言えば，例えばオーケンの考えていた「有機的混沌」「粘液胞」[18)] などが当てはまるだろう。

これらの考え方によれば，それぞれの生物は個々別々の設計により創造されており，たとえ生物の構造に類似性があったとしても，それはただいわば設計の類似性によっている。それゆえ先に述べたように，それらは時間的に相次いで生じたものであるとは見なされず，進化論的考えには至らない。

同じように，上に略述したサンティレールやゲーテの考えには，時間的な概念が欠けているので，彼らの説は時間と共に生物の種が分岐していくというダーウィンの進化論とは決定的に違っていた。

ところで先に述べたように，ビューヒナーの学位論文にも，原型的なものを探ろうという意図が認められるが，そればかりではなく，彼は試験講義の中でも原型に当たるものに言及している。この原型は，「全ての神経が漠とした共通感覚の中で活動している最も単純な有機体」[19)] であり，そこにおいては「絶対的に必要な根源的なものだけが現れている」[20)] と彼は考える。こうした点から，彼もゲーテと同様に，生物に共通の原型的なものを想定していたことが分かる。

しかし，ビューヒナーが想定した原型とゲーテが考えた原型では，決定的に違う点がある。それはゲーテ的な型というのが，「そこにあらゆる動物の形態を可能な限り含んでいるような一般像」[21)] であるのに対して，ビューヒナーのそれは，「絶対的に必要な根源的なものだけ」を備えているという

点である。絶対に必要なものしか備えていないものが，より高等な動物になるためには，そこから何かしら発展がなければならない。これはゲーテ的な型の考えからは出て来得ないものである。

ビューヒナーに明確な進化論的な考えがあったかどうかは判然としないが，このように「歴史的発展が考えられているビューヒナーの原初的動物」[22]の考え方は「ダーウィンの進化論に言う祖先型に近いものである」[23]ように感じられる。

その一方で彼は，試験講義の冒頭で，生理学と解剖学の分野において「イギリスとフランスで」「支配的である」[24]目的論的思想を否定し，自分がゲーテ的なドイツ自然哲学を支持することを明言している。

ビューヒナーが目的論を否定するのは，目的論的見解に従うと「全ての有機体は[…]複雑な機械」[25]とみなされ，従って人間でさえも機械になってしまうからである。そこから，彼が目的論を否定するのは，目的論が機械論と結びついていると考えているためであることが分かる。ビューヒナーはさらに，目的論的思想は「目的のまた目的を求め」，[26]「どのような問題においても無限の課程（progressus in infinitum）を歩む」[27]ことになってしまうと述べ，目的論的思想を退ける。彼は自然の目的というものについて試験講義で次のように述べている。

> 「自然は目的に従って行動することはありません。自然は一方が他方を制約するような目的の無限の連鎖の中で消耗してしまうこともありません。そうではなく，自然はその全ての現象において直接自分自身に満足しているのです。存在するものは全て自分自身のためにそこに存在しているのです。この存在の法則を求めることが，目的論的な見解に対立する，私が哲学的方法と呼ぶ見解の目標なのです。」[28]

このようにビューヒナーは，自然の目的は自分自身であるとすることによって，目的の目的をたどり続け，目的の「無限循環」[29]に陥ることを避けようとする。さらに彼は，自然の中に「最も単純な設計図と線引きに従って最も高度で純粋な形態を生み出す」「根本法則」[30]を見いだし，それにより自然は「調和」を得ていると考え，目的論を否定する。彼はこの法則を美的法則と名付け，次のように述べている。

> 「哲学的方法にとっては，個体の物質的存在の全てはそれ自身の維持のために作り上げられるのではなく，根本法則，つまり最も単

純な設計図と線引きに従って最も高度で純粋な形態を生み出す美的法則の現れとなるのです。哲学的方法にとっては，形式も素材も全てこの法則と結びついています。全ての機能はこの法則の作用なのです。つまりそれはどんな外的目的によっても規定されませんし，そのいわゆる合目的的な相互作用と共同作用というものは，この同じ一つの法則がさまざまなかたちとなって現れるとしてもそこに必然的に調和がある，ということ以外は何ものも意味しないのです。その法則の作用は，もちろんお互いを妨げることは無いのですから。」[31)]

つまり，ここでビューヒナーは，自然は根源的な法則により成り立ち調和を得ているのであり，目的などはなく，全てはその法則に従って動いているだけである，と考えている。

このように自然の中に根源的な法則を見いだし，それにより自然を統一しようとする方法は，ゲーテが「型の統一」と呼び，サンティレールが「プランの統一」と名付け，動物を理念的に統一して把握しようとしたのと同じ方法であり，明らかにゲーテらの自然哲学の伝統の中に位置している。

このようなビューヒナーの自然に対する態度，考え方からは，最終的に一つの大きな特徴が見えてくる。それは自然の目的を問うことなく，その自然の中にある根源的なものをあるがまま見つめていこうとする姿勢である。

このビューヒナーの姿勢は，例えば次のような言葉に最も端的に現れてくる。

「眼を湿らせるために涙腺が存在しているのではありません。そうではなく，涙腺が存在しているから眼が湿るのです。別の例を挙げれば，私たちは物をつかむために手を持っているのではありません。そうではなく手があるから物をつかめるのです。」[32)]

その他にも彼は家族に宛てた手紙の中で次のように述べている。

「劇作家の最高の課題は，現実に生起している歴史にできるだけ近づく，ということなのです。彼の本は歴史そのものより道徳的であっても道徳的でなくてもいけないのです。[…] それでもまだ僕に，詩人は世界をあるがまま示すのではなく，世界のあるべき姿を示さなければならないのだと言う人がいるのならば，僕は，世界をあるべき姿に創ったはずに違いない神様よりも，世界を立派に創ろうと

は思わないと答えましょう。」[33)]
（1835年7月28日　家族に宛てて）

ここで彼は，詩人は「世界をあるがまま示す」べきであると述べているが，あるがままを示すためにはあるがままを見ることができなければならない。従って，このビューヒナーの発言は，自然をあるがまま見つめていくべきであるということとほぼ同じことを述べていると考えてよい。自然に根源的な法則があると考え，そこに調和を見るビューヒナーは，そのような自然をあるがまま見つめていくことによって，自然の実相をこそまず見つめていくべきだと考えていた，と言うことができるのである。

ビューヒナーが生きたのは，自然科学が経験論的な手法へと移行する時代であった。精緻な解剖を行い，それをもとに考察を重ねた点に見られるように，彼は，自分でも経験論的な手法を用い，非常に客観的，実証的な研究者であったが，その一方でゲーテ的な自然観に共感を覚え目的論的考えを否定していた。また彼は，特に生物の原型という点ではゲーテやサンティレールなどの同時代の人よりも進んだ，よりダーウィンの進化論に迫る考えを持っていたと思われるが，最終的に自然を把握しようとする時には，上に挙げた引用に見られるように，当時のドイツの自然哲学的な概念とも言える「美的法則」という「根本法則」を設定することによって，自然を調和の中にあるものとして考え，把握しようとした。これらのことはいわば，彼自身の中でもゲーテ的自然哲学的な手法と経験論的な手法とが，多少なりともせめぎあっていたということを示している。

だが先に述べたように，そのようなゲーテ的な自然哲学はその後急速に衰え，機械論的唯物論的世界観が（その是非は別として）支配的になっていく。しかし今日では，そのような世界観に内在する問題が明らかとなり，ゲーテ的な自然哲学も様々な点から見なおされている。

「あらゆる人間が僕には死人のような顔をしているように見えた。目はガラス球のように無表情だし，頬は蝋で作られたみたいだ。からくりの機械が演奏を始め，関節がぴくぴくと動き，声はがらがらだ。変わりばえの無いオルガンの震えて歌うのが聞こえてきて，オルガンの箱の中で円筒とピンとがはねたり回転したりしているのが見えた。このコンサート，箱，メロディーがいまいましい。あぁ，僕らは惨めに喚いているだけの音楽家だ。拷問具の上であげたうめき声は，ただ雲の割れ目を突き抜け，遠くへ遠くへと響きわたり，メロディーを奏でる吐息のようになって，天の耳の中で死に絶える

だけなのだろうか。」[34)]
(1834年3月8日から9日にかけて　婚約者に宛てて)

「一番いいのは想像力が活発になり，機械的な標本作りの作業が想像力の活動の余地を残してくれることだ。僕はいつも魚のしっぽやかえるの指の間にぼんやりと浮かぶ君を見ている。」[35)]
(1837年1月13日　婚約者に宛てて)

人間が死相を呈した機械仕掛けのオルガンに見え，「機械的な標本作りの作業」の際にプレパラートを通して婚約者の面影を見るビューヒナーは，ゲーテ的自然哲学の立場に立つ自分にも機械論的な思想が否応なしに迫ってくるのを，今日の私たち同様，強く感じていたのかもしれない。

3

このように観察してくると，彼の自然観は，それ自体としてはとりわけ独創的な点は無いように見える。しかし文学作品との関連で考えてみると，むしろこのような自然に対するビューヒナーの態度が，いまだアクチュアルでありつづける彼の作品に，大きく影響を与えているのではないかと考えられる。

この点を明らかにするには，まずビューヒナーが自然科学の研究のみに没頭しなかった原因はどこにあるのかということを考えねばならない。それは端的に言えば，彼が人間の力を超えた何ものかの存在を強く認識していたということに起因するものと思われる。

いわゆる「宿命論の手紙」と呼ばれる彼の有名な手紙には，次のように書かれている。

「僕は革命の歴史を勉強した。恐ろしい歴史の宿命論に打ちのめされたように感じた。人間の本性の内に恐ろしい同一性があり，人間の状況の中には逃れることのできない力があるのが見えてきた。この力は皆に与えられながら，誰にも与えられていない。一人一人の人間は波の上の泡にすぎず，偉業もほんの偶然のものであるし，天才の支配も一種の人形劇で，鉄の法則に対する滑稽な悪あがきにすぎない。我々にできるのはせいぜいそれがあることを知ることであり，この法則を支配することは不可能だ。歴史上の華々しくは見えてもどうしようもない人たちにも，歴史のすみっこに立っている

人たちにも，僕はもはや頭を下げる気はしない。僕は自分の目を血に慣れさせた。しかし僕はギロチンの刃ではない。必然とは呪いの言葉だ。人間はこの言葉の洗礼を受けてきた。<躓きは必ず来たるべし。しかし躓きをもたらす者は禍なり。>（引用者注：聖書マタイ伝18章7節）――この言葉は身震いするほど恐ろしい。僕らの内で，偽り，殺し，盗みを働くものは何なのだろう。もうこれ以上このことを考えるのはやめよう。……」[36]
（1834年1月の中頃から終わりにかけて　婚約者に宛てて）[37]

まず彼は，「革命の歴史を勉強した」と書いている。この革命とはもちろんフランス革命のことである。つまりこの手紙には，フランス「革命の歴史を勉強した」ビューヒナーが「歴史の宿命論に打ちのめされた」様が書かれている。フランス革命を勉強して彼が何を知ったのかは，具体的に書かれているわけではない。しかしビューヒナーが見たものは，次々と裏切られていく社会変革の夢，そして民衆の前で次々と首を切られていく昨日の英雄たちの姿，そういった革命を実際に先導してきた革命家たちの，滑稽なまでの悲惨さや無力さであったと推測できる。[38] ビューヒナーは「一人一人の人間」の無力さ，そしてそれと同時にまた偉業を行った歴史上の「英雄」や「天才」の無力さを知ったのである。早くから英雄主義的，理想主義的なところがあったビューヒナーにとって，[39] これは大きな衝撃を与えるものであった。

さらに彼は「僕はギロチンの刃ではない。必然とは呪いの言葉だ。」と書いている。ここから読み取れるのは，革命においては不可避なことであるとしても，革命家が血を流さざるを得ないことに対するビューヒナーの葛藤である。ビューヒナーは，幼い頃父に革命の英雄の話をしばしば聞かされたというが，改めて見たフランス革命は，彼に全く別の側面を示したのである。政治犯罪を行うことを避けられない，英雄であるだけではなく血に染まった者としての革命家の姿は，これから革命へ向かおうというビューヒナーに，大きな衝撃を与えるものであった。

このように大きな衝撃を受けた彼の認識は，革命に限定されるわけではない。彼の認識はさらにこの世界そのものへと至る。それは，この世の全ては「歴史の宿命論」と「人間の本性」に従い，そこに人間の自由意志が入り込む余地はなく，一人一人の人間は，たとえどんな偉大と言われる者であっても，結局は小さく無力な存在であるという点で同一であるという認識である。換言すれば，彼はフランス革命の現実から，「人間の本性の内」にあるこの「同一性」と，人間には「支配することは不可能」な「鉄の法則」の存在を認識したのである。

しかし「我々にできるのはせいぜいそれがあることを知ること」であると書かれているように，人間はそれがあると知るだけで，その正体を知ることができないまま，この何ものかに支配され続けるのである。

それゆえ最後の，それは「何なのだろう」，という切実な問いが出てくる。それは確かに「必然」的なものであり，「鉄の法則」である。しかし彼はそのような言葉でそれが説明され得ないことを知っている。だから彼は最後に「何なのだろう」と自問しながらも，「もうこれ以上考えるのをよそう」と思考を停止せざるを得ない。結局のところ彼は宿命論的な認識を得ると共に，人間を支配するこの宿命がいったい何なのかはっきりと分からないということも明確に述べているのである。正体が分かれば対処のしようもあろうが，そうではない以上，その前では我々は波の上の泡に過ぎず，この正体不明の強大な力を持つものにただ支配されるしかないのである。

しかもこれらのビューヒナーの認識は一時的なものではない。ここで見られる宿命論的な考えは，約一ヵ月後の手紙では環境決定論的な考えとなって再び現れる。

> 「僕は誰のことも軽蔑はしません。少なくともその人の理解力とか，教養とかいう理由では。なぜなら，ばかになるまい，罪を犯すまいと考えても自分の力ではどうにもならないのです。私たちは誰でも同じ環境であったら，皆同じような人間になるだろうし，環境は人間の力の及ばないところにあるのですから。」[40]
> （1834年2月　家族に宛てて）

このような認識を持ちながらも，彼は革命運動に身をゆだねる。これはビューヒナー研究の最大の謎とも言える。留学中はドイツで革命運動を行うことの無意味さに何度も触れ，[41] さらに上に挙げた手紙に見られるような宿命論的な考えを吐露しながら，それでもなお彼が革命運動に身をゆだねたのはなぜなのか。この矛盾については様々な見解があるが，ここではそれには立ち入らない。[42] いずれにせよ，彼は宿命論的な考えを持ちつつも革命運動に積極的に関わった。その手始めとして彼は『ヘッセンの急使』というパンフレットを農民に配り，貴族の横暴と搾取を暴こうとした。しかし『急使』による革命運動は，あっさりと内部からの密告によって挫折する。[43] しかも当の農民たちの中には，ビューヒナーたちが多くの危険と犠牲のもとに書いた『ヘッセンの急使』を読まずに，あろうことか役人に届けた者までいると言われている。[44] 密告により多くの同志が捕らえられ，ビューヒナー自身にも司直の手は伸び，結局ビューヒナーは亡命せざるを得なくなる。そ

れにより彼は，上で述べたような支配不能な正体のはっきり分からない何ものかの存在を，さらに強く感じたに違いない。それは投獄や拷問の恐怖と共に，彼の心に強く刻まれた。投獄の恐怖を書いた手紙は，1835年3月の亡命以来最初のものとなる家族宛ての手紙に始まり，その後だんだんと減ってはいくものの，次の年の11月，彼が死ぬ3ヶ月ほど前に家族に宛てた手紙の中で，再び思い起こされている。エリーアス・カネッティが言うように，ビューヒナーの心は亡命成功後もダルムシュタットの牢獄から解き放たれることがなく，同志への負い目や投獄の恐怖は死の直前まで彼の心から消え去ることがなかったと言える。[45)]

「ミンニゲローデは現行犯で捕らえられました。彼によりこれまでの革命運動が全て明らかにされるだろうと考えられています。だからどんなことをしても彼の秘密を吐かせようと試みるでしょう。どうして彼の弱い体が，じわじわとかけられる拷問に耐え得るでしょうか。」[46)]
（1835年3月27日　家族に宛てて）

「しかしダルムシュタットを思い出すと胸がつまります。家や庭，そして思わずあの忌まわしい牢獄が目の前に現れるのです。」[47)]
（1835年7月16日　家族に宛てて）

「僕のところに来た手紙によりますとミンニゲローデは死んだようです。それはつまり彼は三年間責められて殺されたということです。三年間！フランス革命の血に狂った殺人鬼たちは一人を殺すのにせいぜい二，三時間しかかけませんでした。宣告，そしてすぐにギロチンでした！それに比べて三年間！」[48)]
（1836年11月20日　家族に宛てて）

このような革命失敗後に起こることへの恐怖が，既に述べたような正体不明の強大なものに人間は支配されているという絶望的な考えをより強めたということは，大いに考えられる。

それを裏付けるかのように，亡命直前から書かれ始めた彼の作品はどれも，宿命論的な絶望感と不気味さが，また自然の荒々しい暴力性が描かれる。詳しく述べる余裕はないが，『ダントンの死』，『ヴォイツェク』，『レンツ』，そして『レオンスとレーナ』においてもそのことは確認できる。『ダントンの死』では，「宿命論の手紙」と同じ内容の言葉をダントンが吐露するし，『ヴォイ

ツェク』や『レンツ』の主人公は,「俺たちを狂わせるような何か」[49]や「人間には耐えられないような何か」[50]に追い立てられて，一人は殺人を犯し，また一人は狂気へと近づいていく。『レオンスとレーナ』では，主人公である王子レオンスと王女レーナは偶然に出会い，恋に落ち，結ばれるが，それらは全て予定調和的に収まる。つまり彼らにとって偶然と考えられていたことも，実はそうなる宿命であったにすぎない。そう考えると喜劇であるはずのこの戯曲も宿命論的な不気味さを感じさせるものとなる。

これらの作品に現れている世界観を見ると，自然科学研究において，自然の中には根源的なものがあり，それゆえ調和があると述べ，自然を統一的に見，ただそのままを見つめていくべきであると考えたビューヒナーと同一人物が書いたものとは思えないほどの隔たりがあるように感じられる。しかし，本当に自然科学研究と文学作品は関係が無いのだろうか。もしくはこれら二つのものはまったく別のものであり，そのどちらか片方だけがビューヒナーの真実の世界観なのだろうか。

そうではなく，彼の自然観と宿命論的な考えというのは分かちがたく結びついている。結論を先取りして言えば，先に挙げた「あるがままを見つめていくべきである」という彼の自然観の特徴は，宿命論を感じる原因となっている，人間の力を大きく超えた正体不明なものがあるという考えの裏面にすぎないのである。圧倒的な力とか全く理解不可能なものを前にした時に，それをただ受け入れるしかないと考えるのは自然なことであり，それが彼の宿命論につながるとすれば，彼の自然観は彼の宿命論的世界観が違った現れ方をしたものであると考えられるのである。

つまり一方でビューヒナーは,「宿命論の手紙」に見られるように，我々に対して絶対的な力を持つはっきりとは認識できないものの存在に衝撃を受け，それを宿命論的な考えと関係付けて絶望を感じるが，その絶望的な宿命論的世界観を文学作品において表現した。しかしそれと同時に彼は自然に関してもほぼ同じことを感じたのではないだろうか。別な言い方をすれば，人間の歴史に対して何か分からない大きな力を感じたと同時に，自然に対しても彼は大きな力を感じていたのではないだろうか。彼はそれを「美の法則」とか「根本法則」などと名付けてみたものの，それが具体的にどのようなものであるかは述べない。というより，それが何かはっきりと知ることができないために，彼は具体的に述べることができないのである。これは「宿命論の手紙」でビューヒナーが，人間にとって「逃れることのできない力」であり「必然」である「鉄の法則」が存在すると述べながらも，結局はその正体は分からず,「何なのだろうか」と自問せざるを得なかったことと似ている。

そしてそれは文学作品においても同じである。『レンツ』において，主人

公を狂わせていくものの正体は,はっきりと描かれてはいない。ビューヒナーはそれを,「何か恐ろしいもの」[51] とか「人間には耐えられないような何か」などと表現するだけである。『ヴォイツェク』においても，主人公を殺人へと駆り立てたものが何なのかは，結局はっきりとは描かれない。それは例えば「俺たちにはつかめないような何か」[52] であるとか「俺たちを狂わせるような何か」などと表現される。彼らを狂わせ，時には殺人にまで駆り立てるような圧倒的な力を持っていることは確かなのだが，そのものの正体はいつも「何か」であり，それは最後まではっきりと具体的に描かれることは無いのである。

だが，試験講義において「根本法則」と名付けていることからも分かるように，彼はそれこそが自然にとって根源的，本質的なものであると考えていた。それゆえ彼は，正体ははっきりと分からないものの，それをひたすら見つめていくべきであるという自然観を持ったのであろう。

このように見てくると，彼の自然科学研究に現れた自然観と,「宿命論の手紙」や彼の作品に表れる絶望的な宿命論的考えや雰囲気は決して矛盾するようなものではなく，どちらも絶対的な力を持つ正体不明なものがあるという認識を源にする，いわば表裏一体のものであると考えられる。

そのことは彼の文学作品からも見てとれる。先に彼の文学作品は全て宿命論的な絶望感が漂っていると述べたが，決してそれだけではなく，彼の作品では同時に，あるがままを見つめ，受け入れるべきであるということがしばしば述べられるからである。

例えばこれは，小説『レンツ』においては理想主義批判として現れる。主人公レンツは，理想主義の一派であるカウフマンに対して次のように厳しい非難を浴びせる。

> 「現実を表していると言われている詩人たちもまた現実については何も知らない。しかし，彼らは現実を美化しようとする詩人たちよりは，ともかくもまだ我慢できる。神は世界をあるべき姿に創った。だから我々はより良いものを書き上げることはできない。我々の唯一の努力は神に少しばかり倣い創ることだ。私は全ての生の中に存在の可能性を求める。それでいいのだ。我々はそれが美しいのか醜いのかを問う必要は無い。」[53]

同じような内容の文章が，すでに第二章で引用した家族に宛てた手紙の中にも見られる。この手紙は，彼の書いた戯曲『ダントンの死』が不道徳な内容を含んでいることに関しての両親に対する言い訳でもあるが，上で挙げた

ように『レンツ』の中にも同じようなことが書かれていることからも，単なる言い訳ではなく，ビューヒナーの本心であると考えていい。

あるがままを捉え，示すことが大事であるという考えは，彼の自然観の特徴でもある，そのまま見つめていくべきであるという姿勢と，ほぼ同じことであると言える。そしてこれらの考えは，『レンツ』や手紙の例に見られるように，決して消極的なものではない。それどころか，むしろそこに見られるのは積極的な姿勢である。なぜなら彼の作品は絶望的な宿命論的世界観に彩られると同時に，彼の自然科学研究に見られるような，あるがままをこそ，世界の実相をこそまず見つめていくべきであるという，むしろ積極的な世界観を表現しているからである。

彼の自然科学研究に見られる自然観と，手紙や文学作品に表れる宿命論的な世界観とは，表裏一体のものであり決して矛盾するものではなく，どちらか片方だけが真実というわけではない。そうではなくて，それらはどちらも，認識不可能な絶対的，根源的なものがあるという同じ考えに基づいており，それをそれぞれ違う面から見たものであり，彼の中で全く矛盾なく同時に存在し得るものだったのである。それゆえ彼は，創作活動と自然科学研究を矛盾なく同時に，そしてまた冒頭に述べたように，むしろ両者から刺激を受けて，いわば両者が影響し合い共鳴し合う中で進めることができたのである。

注

テクストは

Büchner, Georg: Sämtliche Werke. Hrsg. von Henri Poschmann unter Mitarbeit von Rosemarie Poschmann. 2 Bde. Frankfurt am Main（Deutscher Klassiker Verlag）1992 und 1999. により，注においてはDKVという略号を用いた。

1）このビューヒナーの論文「ニゴイの神経系についての研究論文」（Mémoire sur le système nerveux du barbeau（Cyprinus barbus L.））は，ビューヒナーが1836年4月13日，20日，そして5月4日と三日間にわたりシュトラスブルク博物学会で発表したものを改稿し，「シュトラスブルク博物学会論集 (Mémoires de la Sosiété du Muséum d'histoire naturelle de Strasbourg）に掲載されたものである。その後1836年9月に，この論文はチューリッヒ大学の哲学部によってドクターの学位論文として認められた。またこの発表はフランス語で行なわれ，論文もフランス語で書かれている。以下本文中に挙げるこの論文からの引用は，DKVに収められているOtto Döhnerによるドイツ語訳（DKV, Bd.2, S.504-600.）からのものである。注にはドイツ語訳の頁の他に，フラン

ス語で書かれた原文の頁を括弧内に挙げている。

2）DKV, Bd.2, S.397.

3）DKV, Bd.2, S.402.

4）DKV, Bd.2, S.437.

5）DKV, Bd.2, S.448.

6）DKV, Bd.2, S.465.

7）DKV, Bd2, S.441.

8）DKV, Bd2, S.582f.（DKV, Bd2, S.139.）

9）DKV, Bd2, S.504.（DKV, Bd2, S.69.）

10）以下当時の自然観については，Mason, Stephen F.: A History of the Sciences. New York（Macmillan Publishing Company）1962. ならびに Smith, C.U.M.: The Problem of Life. An Essay in the Origins of Biological Thought. Thetford,New York（The Macmillan Press Ltd.）1976. から多くの部分を参照した。またその際，矢島祐利訳：科学の歴史 下（岩波書店）1956 と八杉龍一訳：生命観の歴史 下（岩波書店）1981 をそれぞれ参照させていただいた。

11）Vgl. Mason, Stephen F. : a.a.O., S.360.

12）Vgl. ebd., S.360f.

13）Vgl. Smith, C.U.M.: a.a.O., S.228.

14）Vgl. ebd., S.230f.

15）Goethe, Johann Wolfgang von: Principes de Philosophie Zoologique. In: Johann Wolf-gang Goethe Sämtliche Werke（ = GSW1). Bd18.2. München（Carl Hanser Ver lag）1996. S.535.

16）C. ダーウィン（八杉龍一訳）：種の起源（中）（岩波文庫）1968，49 頁。

17）Mason, Stephen F.:a.a.O., S.358.

18）この粘液胞というのは，全ての生物がそれにより構成される生命の単位であるが，生物の死とともに死ぬことはなく，新たな生物を構成し生き続けると考えられていた。（Vgl. Mason, Stephen F. : ebd., S.359.）

19）DKV, Bd2, S.162.

20）DKV, Bd2, S.162.

21）Goethe, Johann Wolfgang von: Erster Entwurf einer allgemeinnen Einleitung in die vergleichende Anatomie, ausgehend von der Osteologie. In: Johann Wolfgang Goethe Sämtliche Werke. Bd12. München（Carl Hanser）1996. S. 122.

22）荒川宗晴：自然科学者としてのビューヒナー〔「上智大学ドイツ文学論集」22 号〕1985，85-86 頁。

23）同上，85 頁

24）DKV, Bd2, S.157.

25）DKV, Bd2, S.157.
26）DKV, Bd2, S.158.
27）DKV, Bd2, S.158.
28）DKV, Bd2, S.158. ポシュマンはDKV版のこの箇所の注で，試験講義では「哲学的（philosophisch）」という言葉は，学位論文における「発生論的（genetisch）」と同じ意味で使われている，と述べている。この「哲学的」という言葉は，上で説明してきたドイツ自然哲学と直接関係するものではないが，ビューヒナーの考えには，明らかにゲーテらの考えと共通性を見ることができるのである。
29）DKV, Bd2, S.158.
30）DKV, Bd2, S.158.
31）DKV, Bd2, S.158f.
32）DKV, Bd2, S.158.
33）DKV, Bd2, S.410f.
34）DKV, Bd2, S.381.
35）DKV, Bd2, S.464.
36）DKV, Bd2, S.377f.
37）この手紙が書かれた日付に関しては，従来様々な議論がなされてきた。主に1833年の冬から1834年の3月の間に書かれたと推論されることが多かったようである。最近では，J・クリストフ・ハウシルトのように，当時の気候に関する報告を考慮して，1834年の1月の中頃から終りにかけて書かれたのではないかという見解も有力であるようだ。（Vgl. DKV, Bd2, S.1098ff.）ハウシルト自身は1月10日から20日の間と推定している。（Vgl. Hauschild, Jan-Christoph: Georg Büchner. Biographie. Stuttgart, Weimar 1993, S.268ff.）ここではそのようなことを考慮しているDKVに基づき日付をつけた。
38）彼がこの時読んだ本については，いくつかの推論が成されているが確定はしていない。例えばT・M・マイヤーは，ビューヒナーはチエールとミニェの歴史書を読んだのではないかと推定している。（Mayer, Thomas Michael: Georg Büchner. Eine kurze Chronik zu Leben und Werk. In: Georg Büchner Ⅰ / Ⅱ（ = GB Ⅰ / Ⅱ), hrsg. von Heinz Ludwig Arnold, München (Edition text+kritik) 1979, S.372.）
39）例えばビューヒナーは，ギムナジウム時代「400人のプフォルツハイム人の英雄的死」というスピーチで，「崇高なのは，自然とたたかう人間を見ることである。彼は強大な力でもって，荒れ狂う自然の力の猛威に抵抗し，精神の力を頼みに自然の力をおのれの意志に従わせる。しかしさらに崇高なのは，自分の宿命とたたかう人を見ることである。彼は勇敢にも時の歯車を掴

もうと手をのばす。そして自己の目的を成し遂げるために，彼の持つ最も高貴なもの，彼の全てを賭すのである。」（DKV, Bd2. S.18.）と述べている。またほぼ同じ文章が，上のスピーチの約一年後に書いた「ウティカのカトー」にそのまま使われている。「偉大であり崇高であるのは，自然とたたかう人間を見ることである。彼は荒れ狂う自然の力の猛威に激しく抵抗し，精神の力を頼みに自然の荒々しい力をおのれの意志に従わせる。しかしさらに崇高なのは，自分の宿命とたたかう人を見ることである。彼は勇敢にも世界史の歩みに介入する。そして自己の目的を成し遂げるために，彼の持つ最も高貴なもの，彼の全てを賭すのである。」（DKV, Bd2. S.30.）このようなことが繰り返し述べられていることからも，彼には早くから英雄主義的，理想主義的なところが多分にあったと推測される。

40）DKV, Bd2. S.378.

41）例えば彼は，留学中の1833年の4月6日に家族へ宛てて書いた手紙の中では，「これから起こるかもしれないどんな事件にも参加することはないでしょう。」と書き，さらに「ドイツ人たちは，自分の権利のために戦う心構えができている国民である」という考えは「ばかげた考え」（DKV, Bd2. S.367.）であると書いている。その後も「僕はギーセンの田舎政治や革命ごっこに関わり合ったりはしません。」（1833年6月　家族に宛てて）（DKV, S.369.）などと，革命に加わる意思の無いことが手紙の中で述べられている。しかしもちろん彼は，革命に対して興味を持っていなかったわけではない。これらの手紙以外にも，留学時代の手紙の中で彼が幾度となく各地の革命運動について触れているということから，むしろビューヒナーは，革命運動に対して多大な興味を持っていたことがうかがえる。

42）例えばT・M・マイヤーは，宿命論の手紙を，ビューヒナーの深刻な心理状態を表すものではなく，恋人であるミンナに手紙を出せないことについての言い訳の手紙であると考える。つまりマイヤーは，ビューヒナーは当時，革命運動に没頭し恋人に手紙を出す余裕がなく，そのことに対するミンナの非難を，このように精神状態の危機を告げる手紙を書き送ることでかわそうと考えた，というのである。それゆえ彼が革命運動に参加しても矛盾は無いし，ビューヒナーは現実を客観的に把握しながら運動の可能性と限界を見極めたと，マイヤーは述べている。（Vgl. Mayer, Thomas Michael:　Büchner und Weidig − Frühkommunismus und revolutionäre Demokratie. In : GB Ⅰ/Ⅱ, S.95ff.）しかし「宿命論の手紙」の前後に書かれたいくつかの手紙も，彼の精神状態がこの時期落ち込んでいたことを示している。また彼には幼い頃から英雄主義的，理想主義的なところが多分にあった。そのようなビューヒナーに，「宿命論の手紙」に見られるような英雄や天才をも含む人間そのものの無力さ，

同一性の認識が，大きな衝撃を与えたであろうことは想像に難くない。さらにこの「宿命論の手紙」をビューヒナーが書いたのは，彼自身も革命運動を行なおうという，まさにその直前の時期であった。そのような時に改めて知ったフランス革命の残虐さ，残酷な現実もまた，彼に大きな衝撃を与えたと考えるのが妥当であると筆者には思われる。

43）Mayer, Thomas Michael: Georg Büchner. Eine kurze Chronik zu Leben und Werk. In: GB Ⅰ / Ⅱ, S.383f.

44）Büchner, Georg: Werke und Briefe. Hrsg. von Fritz Bergmann. 2 Bde. 13.Auflage. Frankfurt am Main (Insel Verlag) 1979, S.562.

45）Büchner-Preis-Reden 1972-1983. Hrsg. von der Deutschen Akademie für Sprache und Dichtung, Stuttgart (Philipp Reclam jun.) 1984, S.9ff.

46）DKV, Bd2. S.399.

47）DKV, Bd2. S.408.

48）DKV, Bd2. S.457.

49）DKV, Bd1. S.192.

50）DKV, Bd1. S.226.

51）DKV, Bd1. S.226.

52）DKV, Bd1. S.192.

53）DKV, Bd1. S.233f.

Zum Problem der Naturwissenschaft und des Fatalismus bei Georg Büchner

Takushi TAKEUCHI

Georg Büchner ist heute viel berühmter durch seine literarischen Werke als durch seine naturwissenschaftlichen Arbeiten. Aber eigentlich betrieb er hingebungsvoll das Studium der medizinisch-philosophischen Wissenschaften und laut eines seiner Briefe verfasste er seine literarischen Werke, nur um ein wenig Geld zu verdienen.

Er schrieb seine Werke – *Lenz, Woyzeck, Leonce und Lena* – gleichzeitig mit seiner Doktorarbeit. Obwohl das Studium ihn voll in Anspruch nahm, schrieb er diese Werke ohne Unterbrechung. Dies hängt zum einen mit seinem natürlichen Drang zu dichten, zum anderen mit der Übereinstimmung seiner medizinischen Forschung und seines literarischen Schreibens zusammen. In diesem Aufsatz möchte ich Büchners Naturverständnis, das sich in einer naturwissenschaftlichen Arbeit über das Nervensystem der Barben, *Mémoire sur le système nerveux du barbeau* zeigt, und die grundlegenden Gedanken aus seiner Probevorlesung *Über Schädelnerven* untersuchen und den Zusammenhang von Naturverständnis und Literatur bei Büchner aufzeigen.

Sein Medizinstudium ist im Allgemeinen präzis und sorgfältig, auf Sezierungen begründet, und seine Beschreibungen sind sehr objektiv. Sein Denken in jener Zeit, in der die Naturwissenschaft immer empirischer wurde, lässt sich als sehr positivistisch und empirisch bezeichnen. Aber um die Natur zu begreifen, brauchte Büchner schließlich eine naturphilosophische Methode; er erkannte ein „Gesetz der Schönheit" als ein „Urgesetz" in der Natur und dachte, dass die Natur in der „notwendigen Harmonie" ist. Man solle die Natur in der Harmonie, wie sie ist, betrachten und ihre wahre Gestalt erkennen. Man kann sagen, dass in ihm die naturphilosophische und empiristische Methode parallel existierten.

Andererseits schrieb er in einem an seine Braut adressierten Brief, dem sogenannten *Fatalismusbrief*, über den „grässlichen Fatalismus", das „Muss", ein „ehernes Gesetz" und eine „unabwendbare Gewalt". Bereits längere Zeit vor seinen Revolutionsbestrebungen gegen die herrschende Klasse im Großherzogtum

Hessen, die er in der politischen Flugschrift „Der Hessische Landbote“ zum Ausdruck brachte, hatte er die Macht erkannt, die über die Menschen herrscht und auch, dass eine solche politische Revolution nicht nach Wunsch stattfinden kann. Aus dem Grund war Büchner oftmals verzweifelt. Der Misserfolg seiner Revolutionsbestrebungen muss seine Verzweiflung und seinen Fatalismus noch mehr vertieft haben. Das kann man in seinen literarischen Werken sehen, die voll einer fatalistischen und verzweifelten Stimmung sind.

Diese Weltanschauung steht im Widerspruch zu seinem Naturverständnis, welches besagt, dass die Natur in Harmonie sei und man sie, wie sie ist, nur ansehen solle. Aber diese beiden Bereiche, nämlich, seine Weltanschauung in seinen Werken und sein Naturverständnis in seinen naturwissenschaftlichen Arbeiten, beruhen auf den gemeinsamen Grundlagen eines Denkens, das sich für uns nicht ohne weiteres gedanklich erschließt. Wie oben erwähnt, spürte Büchner eine unklare große Macht, die über die Menschen herrscht und die er in seinen Werken darstellte, und zugleich spürte er die gleiche Macht in der Natur. Er nannte die Macht in der Natur „Gesetz der Schönheit“ oder „Urgesetz“, aber er stellte nie konkret dar, was dies besagt, weil er es nicht deutlich erkennen konnte. Was Büchner jedoch als „Urgesetz“ bezeichnete, erachtete er als wesentlich und ursprünglich für die Natur. Deshalb soll man nach Büchners Naturverständnis zuerst die Natur einfach anschauen, auch wenn man ihre wirkliche Gestalt nicht erkennen kann. Auch in seinen Werken drükkte er sich über diese Macht nur unbestimmt aus; z.B. etwas „Entsetzliches“ oder „etwas, was uns von Sinnen bringt“.

Sein Naturverständnis, das sich in seinen medizinischen Studien zeigt, und sein hoffnungsloser fatalistischer Gedanke in dem *Fatalismusbrief*, wie auch seine literarischen Werke, enthalten keine sich widersprechenden Gedanken. Die dort ausgeführten Überlegungen entspringen alle gleichermaßen dem Gedanken, dass es etwas Unerkennbares über unserer Kraft gibt, etwas, das „wir nicht fassen“ können. Also konnte Büchner sein literarisches Schreiben und seine medizinischen Forschungen gleichzeitig und nicht im Widerspruch zueinander, sondern vielmehr in ihrer Wechselwirkung aufeinander bezogen, betreiben.